初期近代のサン・ピエトロ聖堂造営事業からみた建築の生と死：建築の永続性をめぐって

岡北一孝

1. はじめに

人文主義者で芸術理論を数多く残し、建築作品も多く手がけたアルベルティ（Leon Battista Alberti, 1404-1472）は、建築家を医者に擬えて、いまある建築の「命」を永続させることを重要視していた。建築を人間＝命ある有機物ととらえ、それぞれの建築の固有の生と死を問題にしたのである。これは独自の建築保存論の展開へと結実する一方で、既存建築の改築や増築を特徴とする自身の建築創作にも適用された[1]。

アルベルティに限らず、人間と建築をアナロジカルに結びつける建築論はルネサンス期に隆興した[2]。神の似姿としての人間と、それから派生する人体寸法・比例の建築への適応というアイデアが、創作の手がかりであった。建築書の始原ともいえる古代ローマの建築家ウィトルーウィウス（Marcus Vitruvius Pollio, B.C. 90年頃-20年頃）の『建築十書 *De architettura libri decem*』（B.C. 33-14年に執筆）でも、建築の形式や寸法体系、細部の組み合わせ（これが建築オーダーと呼ばれることになる）が人体に由来することが語られていた。その建築書が建築家のバイブルであったルネサンス期には、影響を受けたさまざまな建築オーダー論が著された。そのほかによく知られているのは、ウィトルーウィウス的人体図である。レオナルド（Leonardo Da Vinci, 1452-1519）によるものが最も著名で、そこでは円や正方形と人間の身体が重ね合わされて、人体がいかに理想的なプロポーションであるのかが示されていた。

古代建築の古典化と理論化を通じて、古代建築の造形原理や建築言語を用いた新たな建築創造に力が注がれていた。ただしこの時には、アルベルティがこだわっていた建築固有の生という問題は脇に置かれていたように思える。なぜならば、ほとんどの建築家たちは、半ば廃墟と化したローマ建築の保存や修復には興味をあまり示さなかったと思えるからである。

アルベルティが先鞭をつけた設計と施工の分離と、ルネサンス以降の建築家の職能の成立からすると、建築家にとっては、建築を媒介するもの（図面と模型）が完成した時点が建築の生の瞬間であるともとらえられる。マリオ・カルポが論じたように、そのメディウムこそがオリジナルであり、実際の建築はコピーに過ぎないのであれば、建築の「オリジナル」は、それにもとづく建築が、大胆にかたちを変えたとしても、取り壊されたとしても、永遠の生を持つとも考えうる[3]。

現代的な感覚ならば、理想とする文化の遺産はできる限り大切に残そうと、建築保存的なアプローチが模索されるはずである。古代建築を文化財と認識し、それらを価値づけ、国宝や重要文化財などと階層化し、評価に応じて、しかるべき手段を取るところである。当時はそれが一般的にはみられないどころか、コロセウムのような代表的なモニュメントさえ、建設活動の材料供給のために破壊していた。彼らにとっては、それぞれの個別の建築的な価値よりは、遺跡やモニュメント群が総体として示す造形的特徴を抽出し、理論化し、実作に適用していくことが重要であったのだろうか。

ものの存続に大きくフォーカスする文化財という今日の概念を適用すれば、その枠組みの中で行われる保存、修理、修復あるいはリノベーションといった、いま一般的な過去の建築へのアプローチは確かにそれほどみられない。だからといって、それらの一つ一つを大切にしていなかったとは言い切れない[4]。その意味においては、建築のライフサイクル（生と死）についての考え方も、われわれとはずいぶんずれがあるのではないだろうか。そこで本稿では、建築の生と死という観点からルネサンス期の人々がどのように過去の建築を保存あるいは継承しようとしたのかを、考えてみたい。

その考察において欠かせないのは、この時代の特徴が古代文化・芸術の再生運動であった以上、当時の人々の古代建築への態度を具体的に明らかにすることである。彼らが古代の遺産をどのように扱ったのかを知ることは、その建設活動の実態やルネサンス概念の解明にもつながる。特に注意しなくてはならないのは、古代建築とそうでない建築、言い換えると、手本とすべきモデルである建築とそうでない建築を、どのような基準で切り分けていたかという点である。われわれが古代建築と定義するものと、当時その範疇にあったものが異なるのは当然であろう。ルネサンスの人たちはいかなる判断のもとに、眼前に広がるさまざまな過去の建築を分類し、価値づけを

していたのであろうか。

そこで以下の順に筆を進めていく。まずは、当時どのような建築が古代建築あるいは「古典」建築と考えられたのかを探っていく。次にそうしたある種のモデルとするべき重要な建物に対して、彼らがいかなるアプローチをとったのかを記述する。そして最後に、一つのケーススタディとして、サン・ピエトロ聖堂の造営事業を取り上げる。

なぜサン・ピエトロ聖堂を扱うのかを先に簡単に示しておきたい。教皇ニコラウス五世（在位：1447-55）は老朽化と手狭さゆえに、4 世紀にコンスタンティヌス（在位：306-337）によって建設された由緒あるサン・ピエトロ聖堂（以下、旧聖堂とする）を改築する計画を立てた。これがいまのサン・ピエトロ聖堂（以下、新聖堂とする）への出発点となった。17 世紀にいたるまで続いたその壮大な新聖堂造営に関する研究は、考古学的調査、文献や素描に関する悉皆的な考察によって前進してきた[5]。解明すべき大きなテーマは前人未到の計画を実現させた構造的な解決方法と、建築家のアイデアや着想源であったが、創建以降の旧聖堂の継承と保存の問題が近年になって注目されるようになった[6]。とりわけ着目すべきは、17 世紀半ばに新聖堂の工事がほぼ終わった時に、旧聖堂は、地下にわずかな遺構が残るまでに、壊されてしまったことだ。つまりかたちの上では旧聖堂は保存されなかった。

しかし結論を先取りして述べると、旧聖堂の物質的な保存よりも、新聖堂を建設することこそが、モニュメントの継承と永続性につながると彼らは考えていたと思われる。つまり、新聖堂は旧聖堂の再生（ルネサンス）であると同時に、旧聖堂の保存行為の結実でもあったのではないだろうか。

2. ルネサンスにおける古代建築

旧聖堂が壊されてしまったのは、そもそもそれが古代建築ではないために、当時はそれを手本とすべき建築とみなしていなかったからだとなれば、本稿は実りのある議論にはならないだろう。一般的な西洋建築様式史では初期キリスト教建築に分類される旧聖堂は、古代ローマ建築とはみなされていない。つまり、ルネサンス期の人たちもわれわれと同様に、ローマ最盛期の神殿、凱旋門、闘技場、浴場のみを古代建築とみなしていたのであれば、旧聖堂はそれほど大きな価値のあるものではなかったとも考えられるからだ。建築家たちが旧聖堂の建築的価値やモデルとしての重

要性を具体的に語った文書は見つからない。ただし、それは都市ローマの歴史と未来にとって必要不可欠な存在であると考えられていたと思われる。

初期近代になり、資料が多く残るようになったと言っても、建築家たちの古代建築観や、手本とすべき建築をどう定義していたのかを具体的に知ることができる資料はそれほど多くない。15 世紀のフィレンツェにおいて、古代建築言語の導入と推進に大きな役割を果たしたジュリアーノ・ダ・サンガッロ（Giuliano da Sangallo, 1445-1516）と 16 世紀イタリアの代表的建築家であり、イギリスを中心に後世への影響力も絶大であったパッラーディオ（Andrea Palladio, 1508-80）の二人を取りあげて、彼らの古代建築への眼差しをここで検討してみよう。

ジュリアーノは、アルベルティによる古代建築知識の体系化と理論化に続いて、さまざまなスケッチを通して、古代建築の造形的特徴や詳細を収集し、実作にいかしていった。この素描集は、ルネサンスの建築家の「古代」建築観を知るための極めて重要な証言であり、また彼はブラマンテとほぼ同時期にサン・ピエトロ聖堂の造営事業に関わっていた。パッラーディオはサン・ピエトロ聖堂の造営事業に直接関与はしていないが（現場を訪れてアドバイスをしたと言われる）、初期近代を代表する正統的な古典主義者として 16 世紀イタリアの建築史に君臨する。しかし、のちに示すように、その建築家でさえも、われわれが理解するような意味、つまりローマ絶頂期に建てられた皇帝のモニュメント群のみを古代建築と考えていたのではなかった。これら二つのケーススタディは、15・16 世紀イタリアにおける古代建築の解釈の内実をよく示していると考えられるのである。すなわち結論から述べてしまうと、この時代の建築家たちが「古代建築」という時、そこには初期キリスト教から中世にかけてのキリスト教建築も含まれていたと考えられる。

2. 1 パッラーディオの古代

パッラーディオが著した『建築四書 *I quattro libri dell'architettura*』（1570 年初版）における神殿の事例集ともいえる第四書では、古代神殿の例として、サン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂付属洗礼堂とサンタ・コスタンツァ聖堂が示されている。これらの作品はキリスト教建築であり、宗教建築ではあれど、神殿建築ではない。

洗礼堂は、古代建築の再利用であり、「近代の作品」ではあるが、オーダーや装飾は古代作品と同等であり、多くの人々からこれが古代建築とみなされているためにこ

こに挙げたとパラーディオは述べる。一方のコンスタンティヌスの娘コンスタンティナの墓廟は、聖堂に転用された古代建築であるとパッラーディオは認識している。ただ「良き時代」の建築ではなく、ローマでも新しい時代のものであると言及する[7]。遺跡の名称や由来など、『建築四書』は史実からは訂正せねばならない箇所も少なくはない。しかし、パッラーディオの別の著作である『ローマの古代遺跡 *L'antichità di Roma*』(1554年出版)や『教会についての記述 *Descrizione de le Chiese*』(1554年出版)を読んでも、キリスト教のモニュメントと、皇帝たちの「異教」のモニュメントの区別を含め、この建築家が述べるさまざまな建築の造形的特徴や時代性の認識はいまのわれわれとそれほど変わらない[8]。彼が「良き時代」ともいうように、ある観点から見たときに、建築の形式や造形が盛衰するという考え方も確認できる。例えば第四書では、皇帝ハドリアヌス(在位:117-138年)の時代の神殿で、当初の内部空間をほぼ完全に伝えるパンテオンの扱いは別格である。しかしながら、『建築四書』で重要なのは、神殿の事例が古代建築であるかどうかという時代概念やいわゆる様式史観よりも、それが創作の手本にふさわしいかどうかが優先されると書き手が考えていることである。だからこそパッラーディオは先行する建築家によってなされた「現代建築」にも言及する。それは、建てられた当初から、古代建築と肩を並べるものとして賞賛されたブラマンテ(Donato Bramante, 1444-1512)のテンピエットである。ローマ・ルネサンスを代表する建築家が聖ペトロが十字架にかけられた場所に建てた小さなその礼拝堂を、傑作神殿建築の仲間として第四書に記したのである。

2.2 ジュリアーノ・ダ・サンガッロの古代

ジュリアーノ・ダ・サンガッロは、作品の他に、さまざまな建築のデッサンを集めたスケッチブックでも知られている。そのうちの一つで、いまバルベリーニ手稿(Codex Barberini)と呼ばれるものの扉絵には、「この本は、建築家ジュリアーノ・ディ・フランチェスコ・ジャンベルティ、新姓ダ・サンガッロ、によるものである。ローマにて1465年に始まった古代建築の多くの実測図を含む。」[9]と記されている。実際にジュリアーノのスケッチブックを紐解いてみると、古代ローマの遺跡だけでなく、古代末期から初期キリスト教の建築、さらには中世の教会堂や礼拝堂、洗礼堂、そして彼にとっては現代建築といえる、フィレンツェ・ルネサンスの創始者ブルネッレスキ(Filippo Brunelleschi, 1377-1446)の建築やパッラーディオと同様にブラマンテのテンピエット

も描かれている(図 1)。

スケッチブックに収録された建築のその多様性(ビルディングタイプ、形式、装飾、地理的・年代的な広がり)は目を見張る。ジュリアーノのいう「古代」は、それが古代建築かどうかだけではなくて、いまの建築創作に役立てることのできる手本・見本を意味していると思われる。そして、過去の建築を図面やスケッチで記録し、保存し、活用しようとする姿勢がうかがえる。例えば、多角形平面や円形平面をしたいわゆる集中式平面を持つ建築の模範例として、古代神殿だけでなく、洗礼堂、礼拝堂をあわせて写しとっているのである(図 1)。もう一つ注意しておかないといけないのは、彼が古代建築をパッラーディオのようには理解できていなかったのではないことだ。すなわち時代認識や建物の来歴の正確性が欠如していたのではなく、ジュリアーノの場合は、さまざまなモニュメントが、古代建築の特徴を示すという建築の時間的連続性の強調が重要であったのである。

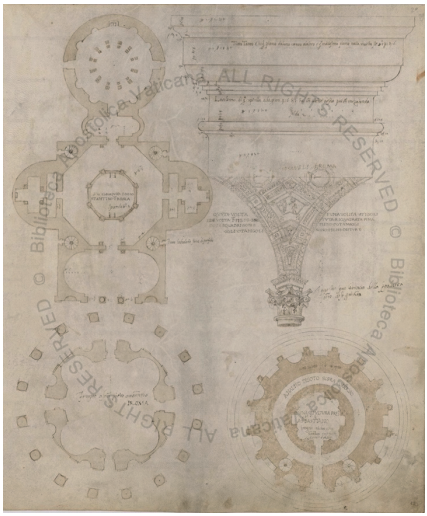
Biblioteca Apostolica Vaticana, ALL RIGHTS RESERVED © Biblioteca Apostolica Vaticana, ALL RIGHTS RESERVED

図1 ジュリアーノの素描。左上にサンタ・コスタンツァ聖堂の平面図があり、その下にサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂付属洗礼堂、さらにテンピエット、その右にローマのサン・セバスティアーノ聖堂の近くにある墓廟の平面が写し取られている。右上にはマルケルス劇場のドーリス式の柱頭の細部が寸法入りで記されている。

2. 3 教会堂建築の受容と評価

キリスト教建築のルネサンスにおける受容と評価は、その時代の建築家の過去や古代に対する理解を教えてくれる。とりわけ 15 世紀イタリアを彩る建築家たち、すなわちブルネッレスキ、ミケロッツォ(Michelozzo di Bartolomeo Michelozzi, 1396-1472)、フランチェスコ・ディ・ジョルジョ(Francesdo di Giorgio Martini, 1439-1501)、そしてジュリアーノのような建築家は、古代ローマ建築の形式や装飾を受け継いだ教会堂建築の形式や形態を積極的に採用していた。初期キリスト教建築のその宗教性が、政治的、社会的な「ふさわしさ」を持つため、意図的にそれをモデルとしたとも考えられて

きたし、単にそれを古代ローマ建築と誤解していたという説もある。研究者たちはさまざまな視点からその現象を説明してきた[10]。

いわゆる初期ルネサンス期の建築家にとっては、建築創作の拠り所とするべきものが教会堂なのか、神殿なのか、真正な古代建築なのかはそれほど大事ではなかった。建築創作において、古代建築の形態や細部のレパートリーにできるかどうかでモデルを選んでいたと考えられる。16 世紀になり、数多くのウィトルーウィウス『建築十書』の翻訳・註解がなされ、古代遺跡や遺物の考古学的ともいえる検証が進むにつれて、何が古代ローマ建築なのか、何がモデルとされるべき建築なのかが限定的になっていく[11]。ラファエッロ（Raffaello Sanzio, 1483-1520）やヴァザーリ（Giorgio Vasari, 1511-74）のテクストは彼らが現代の様式史観に接近することを示すし[12]、セルリオ（Sebastiano Serlio, 1475-1554）やパッラーディオ、ヴィニョーラ（Jacopo Barozzi da Vignola, 1507-1573）の建築書が古典主義建築の教科書の性格を持つことを否定できない。しかしながら、すでにパッラーディオについて述べたように、彼らにとっての古代や古典はわれわれが思っているほど閉じられたものではなかった。またここでそのヴィチェンツァの建築家のローマ観を示す『ローマの古代遺跡』および『教会についての記述』を思い起こさねばならない。

これらのガイドブックは、異教の古代と、キリスト教の現代を扱ったもので、お互いにそれほど関係するものではないという指摘もあった。『ローマの古代遺跡』は『建築四書』に続く「第五の書」の扱いを受けるほどであったが、教会に関する記録は、巡礼のルートと、崇敬の対象となる聖遺物の記述が多く、読者たちの興味をそれほど集めてこなかった[13]。しかしながら、パッラーディオは、古代の異教的文化の美徳と、キリスト教の美徳は矛盾するものではなく、そこに連続性があることを強調していると、2冊の本からは読み取れる[14]。たとえばパッラーディオは『教会についての記述』において、各々の教会堂が古代神殿の転用であったり、素材の再利用であったり、ローマ皇帝に由来するものが教会堂と結びついていることを事細かに指摘する。その連続性こそが教会堂に聖性を与えていると言わんばかりである。

パッラーディオが書いた本には、『都市ローマの驚異 *Mirabilia urbis Romae*』という前例がある。それはローマを訪れた巡礼者がその都市の素晴らしさとそれを彩る不思議なものたちを記しており、最古の版は1140-43年とされ、12世紀後半以降広く読

まれていた[15]。そのガイドは、建物の類型別にリストが掲載されていたり、ローマの地域別（パラティーノの丘やトラステヴェレなど）にモニュメントをまとめたりしている。パッラーディオは明らかにその伝統に依拠している。『都市ローマの驚異』で最も重要なのは、古代の遺跡とそれにまつわる伝説や伝承が、キリスト教の遺跡と一緒に記載されていることである。これはローマへの巡礼者に向けた本ではあったが、異教の建物を非難しているわけではない。その遺跡は聖なる都ローマの景観、遺産の一部と考えられている。これはパッラーディオも同様である。ジュリアーノ・ダ・サンガッロは、いわばより中世的であり、キリスト教と異教のモニュメントをパッラーディオほど明確に区別せず、教会や洗礼堂を神殿（Tempio, Templum）とする。この用語法はアルベルティにもみられるもので、この用語を宗教建築の大まかな分類として使っている[16]。すなわち、古代の異教の時代とキリスト教化された世界は、「古代復興」のこの世紀でも、われわれが思うほど切り離されたものではなかったのである。

2. 4 既存建築へのアプローチ：創作、保存、破壊

図 2 マルケッルス劇場

では、そうした過去の建築・モニュメントに対して、初期近代に具体的にどのような介入があったのだろうか。都市ローマの建設活動に焦点を当ててみると、いわゆるリノベーションの事例はかなり限られる。有名なのは、マルケッルス劇場（図 2）とディオクレティアヌスの浴場であろう。貴重な帝政初期のこの劇場は、ローマ帝国の没落後、石材の供給場所になりつつ、中世には貴族の館や店舗や工房に転用されて、使い続けられてきた。そして 1527 年には、劇場のアーケードの上にローマの貴族サヴェッリ家のための邸宅が増築され、パラッツォとして生まれ変わった[17]。一方の皇帝の浴場は、その劇場の増築からおおよそ 30 年後の 1561 年から工事がスタートした。廃墟化していた浴場を修道院および教会堂に改修することを教皇ピウス四世（在位：1559-65）が決断し、ミケランジェロ（Michelangelo Buonarroti, 1475-1564）にその計画を委ねた[18]。浴場のリノベーションといえば、マルケッルス劇場のリノベーションを担当した建築家ペルッツィ（Baldassarre Peruzzi, 1486-1536）は古代の浴場をローマの名

門オルシーニ家の邸宅にする再生計画案を残す[19]。

これらの建築は例外的存在で、大規模な古代建築は、「巨大な石の塊」でもあるので、どれも「石切場」として破壊される運命にあった。あの偉大なモニュメント、コロセウムでさえ、完全に姿を消すことはなかったが、破壊を免れ得なかった。数多くの古代建築が壊され、新しい建設活動の材料と化すことは日常茶飯事であった。その観点からすると、新聖堂の造営事業が最も大きくローマの遺跡を破壊したのである[20]。こうした遺跡の破壊活動は、人文主義者や芸術家からたびたび非難されており、それら過去の遺産の物質的保存を声高く主張したのがアルベルティでありラファエッロであった[21]。ローマでの大規模な建設活動の中心的存在であり、古代建築を壊すのか保存するのか、その決定権を握っていた教皇たちは、石材の供給と遺跡の保存のバランスを取るために、勅令を出し、古代遺跡の破壊行為に制限をかけた。また違法行為を取り締まる監督官を任命したりした[22]。一方で、教皇の都ローマを実現させるために、教会堂の改修や、道路・水道・市壁といったインフラ整備に資金と労力が投じられた。現代的な意味での教会堂の修復ともいえるような介入も見られる。例えばパンテオンである。この古代神殿は、7 世紀初頭にはサンタ・マリア・アド・マルティレス教会堂と名付けられ、キリスト教の信仰空間として使われてきた。ルネサンス期においては、物理的な完全性を守るために、教皇たちは定期的に修理工事を行い、その宗教的モニュメントとしてのアイデンティティを前景化するために、内部には新しく祭壇を設けたりした[23]。パンテオンの物質的保存措置の最も大きな動機は、パッラーディオがいうような、古代建築とキリスト教会堂の連続性と美徳の一致がこの建築に見られるからであろう。

ローマに無数に存在する過去の建築に対して、ルネサンスの人々がどのような態度で接したのかについては、すでに述べてきたように、その傾向や特徴はさまざまであり、それを単純化することは難しい。それぞれの建物の価値や由来だけでなく、立地や建物の状態、所有者や権力者たちの思惑に左右されることがしばしばであったし、教皇たちによる遺跡・遺産の保存や保護も、何か一貫した価値観や理念のもとに行われた施策というよりは、場当たり的であったように思われる[24]。ただしその当時の人々の遺産に対する態度を曖昧に感じ、文化財の保存や活用の観点から未熟さを感じるのは、過去の建物の保存や継承を「物質的な」残存によって評価しているから

である。建物の物質的な消滅は、その建物の死であり、そうなるとそれが再生することはないと考えているからである。しかしながら、ルネサンスの人々もまたそう認識していたのであろうか。本稿の問いはここにある。壊すことの中に過去の継承をみることはできないのだろうか。

3. 初期近代のサン・ピエトロ聖堂の造営事業

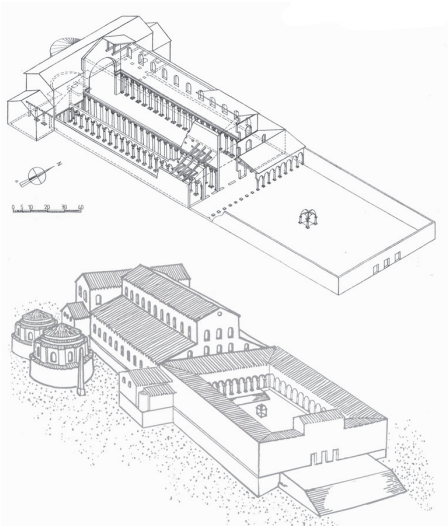

図 3 旧聖堂の復元図(上:ブランデンブルク作成、下:クラウトハイマー作成)

サン・ピエトロ聖堂の創建年代は、はっきりとはわかっていないが、324 年 9 月のクリュソポリスの戦いにおけるコンスタンティヌスの勝利を端緒とすると考えられている。まずは聖ペトロの墓碑に関する装飾が始まり、それから大規模な身廊の工事へ移っていった。そして、墓碑を囲む空間、すなわち内陣・後陣の計画もコンスタンティヌスは決定したが、完成したのは大帝の息子のコンスタンス一世(在位:337-50)の即位後と考えられている。この時にアトリウムを増築している(図 3)。それから 1250 年ほどの間、旧聖堂は西欧では最も重要かつ象徴的な宗教建築であり、建築的な影響力も絶大であった。創建以来、15 世紀にいたるまで、この由緒ある聖堂は修復され、小規模な建築・礼拝堂や装飾が付加され、継承され続けてきた。過去といまが同時に存在する信仰の中心であったし、キリスト教の典礼が発展する上でも重要な場所であった[25]。

旧聖堂の建て替えが浮上するきっかけとして、アヴィニョンへの教皇庁の移転と、15 世紀になってからのローマへの教皇の帰還が挙げられることが多い。1304 年から 1374 年まで教皇がローマを離れたため、主人を失った教会堂はかなり劣悪な状態へと陥り、その後ローマに戻った教皇たちは、それを建て替えざるを得なかったとい

う筋書きである。しかし、旧聖堂とヴァティカン宮殿は、ラテラーノの宮殿と教会堂やサン・パオロ・フオーリ・レ・ムーラ聖堂など、ローマの信仰の中心で、創建が古代末期や初期中世に遡ることができる他の著名な教会堂（バシリカ）よりも状態はよかった。確かに、アヴィニョンの時代には教皇はローマにはいなかったが、旧聖堂は聖職者たちによって守られ、巡礼者や信者が数多く訪れていた。枢機卿、修道士、司教たちは旧聖堂に埋葬されていたし、この教会堂の象徴性に翳りが出ることはなかった。アヴィニョンにいた教皇たちも旧聖堂の維持・整備に資金を投入していたことが記録に残っている[26]。

1420 年、マルティヌス五世（在位：1417-31）の時代にローマに教皇が帰還すると、ヴァティカンは教皇の主要な居所となり、サン・ピエトロ聖堂の役割はますます大きくなった。この教皇以降、その亡骸はみなこのバシリカに埋葬されるようになり、中世に一度廃れた伝統がよみがえった。この旧聖堂の象徴性と連続性は近世・近代の造営事業を考える上で極めて大きなポイントである。

3．1　15 世紀の再建事業（アルベルティとブラマンテ）

旧聖堂の破壊を伴う建設活動は、マルティヌス五世の二代あとの教皇ニコラウス五世から盛んになる。彼の構想の実際、および建設の進捗については明確ではないが、史料をもとに、一定の信頼をおける推定復元図が作成されている[27]。それによると外陣の骨格は旧大聖堂ほぼそのままで、側廊壁にそって新たに多くの礼拝堂が設けられている（図 4）。サン・ピエトロ聖堂はすでに述べたように、聖ペトロが眠る墓の上に立つ。そして、歴代教皇たちの墓もここにあった。様々なモニュメントが旧聖堂内にはところ狭しと並び、ニコラウス五世以降の教皇にとって、自らが眠る場所や記念碑を設置するために十分な場所と礼拝堂が必要とされたのである。一方の内陣は、大幅に拡張した上で、交差部にドーム

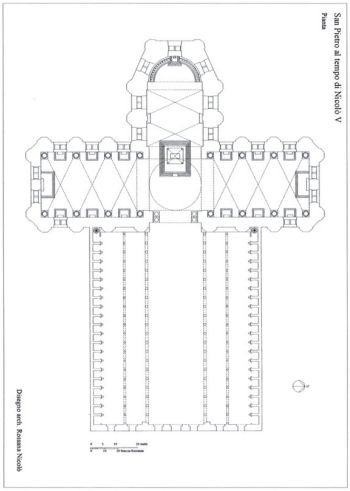

図 4 ニコラウス五世時代の旧聖堂改築案平面復元図（フロンメル案）

を架ける計画であった。これも典礼機能の充足や、ドームの象徴性によって、聖ペトロが眠る空間をより特別な場所とするために仕組まれたものだった。

ニコラウス五世の教会堂改築計画を主導したのが誰であったのか議論が続く。近世になり初めての建築書である『建築論 *De re aedificatoria*』に、旧聖堂の壁の修理の方法について記したアルベルティが、同時代の記録でも工事の責任者として名前が挙がる。しかし一方で、教皇の側近であった人文主義者ジャンノッツォ・マネッティ（Giannozzo Manetti, 1396-1459）による『ニコラウス五世伝』にはその名前はなく、アルベルティの仕事仲間であった彫刻家・建築家ベルナルド・ロッセリーノ（Bernardo Rossellino, 1409-64）が建設の主役としてそこには記されている[28]。とはいえ、アルベルティの関与がなかったとは考えにくい。その根拠の一つが、その万能の天才が確かに手がけた建築とニコラウス五世による旧聖堂の改築計画の類似点である。

サン・ピエトロ聖堂のような霊廟と教会堂が融合したモニュメントの同時代の事例が、アドリア海沿岸の港町リミニのテンピオ・マラテスティアーノの建設、つまり旧サン・フランチェスコ聖堂の改築である[29]（図 5、図 6）。リミニの君主シジスモンド・マラテスタ（Sigismondo Malatesta, 1417-68）が注文主のこの教会堂の改修は、アルベルティによるサン・ピエトロ聖堂再建の縮小版実験作品であったともいわれる。ニコラウス五世がシジスモンドによる教会堂改築を認可したこと、それがサン・ピエトロ聖堂の再建にやや先行すること、アルベルティがその設計に携わった経緯、そしてその霊廟＋教会堂という共通点、さらには古い建物を新しい建物で取り囲み補強しつつ交差部にドームを架けるという計画の類似は無視できない。したがって、旧聖堂の改築はアルベルティが関わっている可能性が極めて高い。ニコラウス五世の時代に行われた工事の実際は、その後の長く続いた建設活動によって上書きされてしまい不詳であるが、外陣を中心とした旧聖堂の構造的補強と物質的な保存が試みられていたのは確かだろ

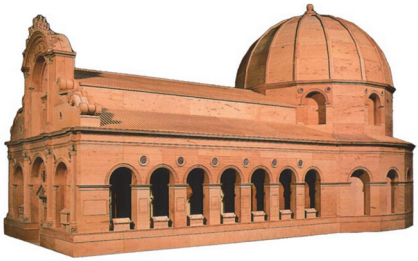

図 5 テンピオ・マラテスティアーノのアルベルティ案の復元図

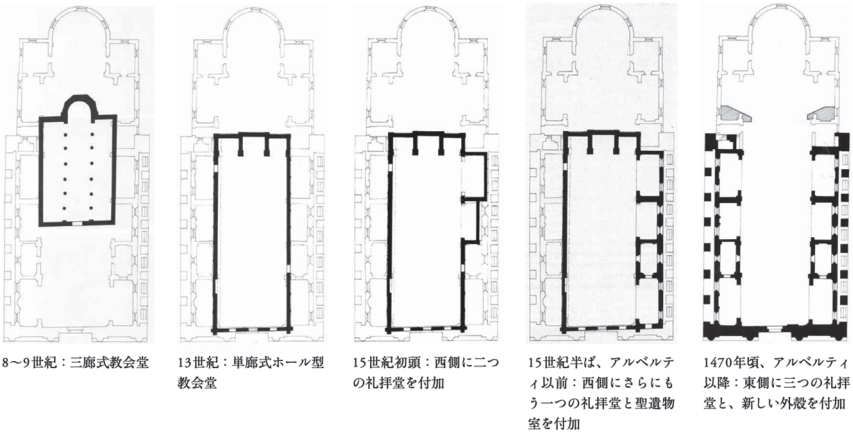

図6 テンピオ・マラテスティアーノの平面変遷図

う。もう一つここで強調しておきたいのは、新しい建物で、古い建物を覆うという手法が重要視されていたことである。

続いて旧聖堂への大規模な介入が見られるのは、ユリウス二世（在位：1503-13）とブラマンテの時代である。そして「羊皮紙の図面」とも言われるブラマンテ直筆の素描から、この時の計画は、集中式平面での再建（新聖堂の建設）であったと考えられてきた。ルネサンス期の建築家たちの興味が純粋幾何学の建築への適用、とりわけ集中式平面の採用にあったことなどがその根拠とされた。旧聖堂をほとんど取り壊し、まったく新しい大教会堂を実現させるつもりであったというわけだ。しかし、残された資料を紐解いてみると、ブラマンテがとりわけ内陣部分の刷新とドーム架構に執念を見せたことはわかるが、外陣を含んだ全体の計画は不詳であり、集中式での教会堂再建の根拠は薄い。ブラマンテ直筆とされるもう一つの素描からは、彼が旧聖堂の平面図とニコラウス五世の計画平面図を重ね合わせて下敷きにし、新しい内陣の構想を練る建築家の姿が浮き彫りになる[30]（図 7）。つまり、ニコラウス五世による計画の基本的な枠組み、つまり、外陣部分の骨格は残しながら、内陣を大幅に拡張・刷新する計画を引き継いでいたとも考えられる。

ユリウス二世は、旧聖堂を大幅に壊すことになるブラマンテの大胆な計画を窘めて、修正を迫っていたことがわかっており、この時の二人の主人公は「破壊者」と呼ばれ

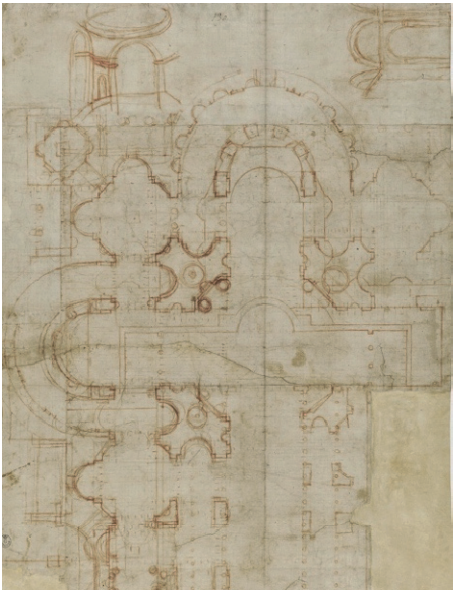

図 7 ブラマンテによるサン・ピエトロ聖堂の計画素描

図 8 ヘームスケルクによるサン・ピエトロ聖堂のスケッチ（ブラマンテのテグリオが奥に見える）

る一方で、旧聖堂の物質的な保存を意識していたようだ。ブラマンテの仕事に、旧聖堂の最も重要な部分ともいえる後陣の祭室（アプシス）部分をすっぽりと覆った覆屋（テグリオ）が挙げられる。これは旧聖堂の最も重要な部分を保護し、その象徴性を高める意図があった。ロレートのサンタ・カーサにある同様の覆屋を設計したのもブラマンテであった。その中に納められた聖遺物は、天使によって運ばれてきたとされる聖母マリアの家である。テグリオが祭室を守ったように、聖地あるいは巨大な聖遺物ともいえる旧聖堂が部分的にでもむき出しになることを避けるために、ニコラウス五世の時の改築案のように、旧聖堂を包む、あるいは覆うことを考えていた可能性は十分にある。

そもそもなぜテグリオが必要とされたのかというと、交差部の巨大なドームを架けるために、内陣は大きく取り壊され、屋根もまた除かれたからである。旧聖堂の最も象徴的な部分が風雨にさらされるていたのである。ブラマンテ以降、16 世紀半ばのサン・ピエトロ聖堂の姿を教えてくれる貴重な資料が、オランダ人画家のファン・ヘームスケルク（Maarten van Heemskerck, 1498-1574）によるスケッチである（図 8）。そのスケッチはさまざまな視点から聖堂を描き出しており、ブラマンテによるテグリオのデザインを教え

てくれる証言でもある。ヘームスケルクはまるで廃墟のようにサン・ピエトロ聖堂を描き出している。床に散らばる建築要素の断片や、聖堂の壁から草が生えている様子は、初めてその絵を見るものにとっては、これが建設中の聖堂には思えないかもしれない[31]。確かにこれらの素描は、建設中の聖堂を祝う喜びよりは、崩壊の過程の悲しみを表現しているように見える。この頃は内陣の工事の進捗は思わしくなく、その遅い歩みは旧聖堂にダメージを明らかに与えていた。1527年に神聖ローマ帝国軍による劫掠という大きな痛手を負ったローマにとって、いかに「旧」と「新」を併存させるかという問題とともに、工事をどれだけ早く終わらせられるかが課題となる。

3.2 新旧聖堂の並存からすべてを包含する新聖堂へ

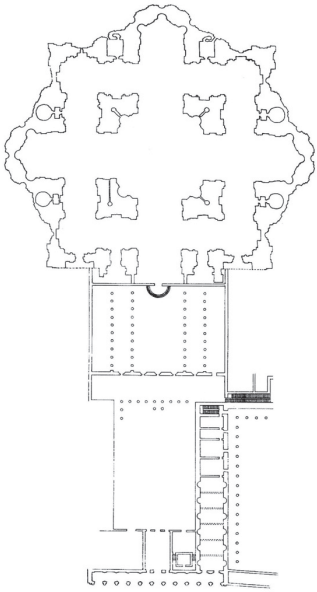

図 9 分離壁で接続する新旧聖堂の復元平面図

その後、名だたる主任建築家たちがさまざまな計画案を提示するも、なかなか造営事業は進まなかった。そのなかで新聖堂の完成に多大な貢献をしたミケランジェロは、ブラマンテに立ち返ることを目標にかかげ、とりわけ前任者アントーニオ・ダ・サンガッロ・イル・ジョーヴァネ（Antonio da Sangallo il Giovane, 1484-1546）の仕事を批判し、すでに出来上がっていた部分を取り壊すほどの辣腕をふるった。そこに後継者たちの創意工夫が加わり、16 世紀が終わるころには、内陣部分とドームがほぼ完成した[32]。画家・版画家デュペラック（Étienne Dupérac, 1535-1694）が描いたミケランジェロによる新聖堂のプランは、ある独立した集中式教会堂の平面を示しているが、実際にこれで完成したわけではない。この時のサン・ピエトロ聖堂は、まさに新旧のハイブリッドであった。つまり二つの聖堂が「分離壁」と呼ばれる壁で接することで並存していた（図 9）。この壁は 1538 年、教皇パウルス三世（在位：1534-49）がアントーニオに作らせたもので、新聖堂の工事から旧聖堂を保護する目的があった[33]。教皇たちはそれを教会堂の重要な一部とみなして豪華に飾り付けたといわれており、

工事中の単なる仮設建造物という訳ではなかった。つまり、分離壁と旧聖堂の外陣部分は、残されるはずであった。

しかしながら、分離壁もろとも旧聖堂を取り壊し、新聖堂を東側に延長させて新たなファサードを建設する計画が実行に移される。1605 年、パウルス五世(在位:1605-21)の治世のことである。これは素朴に考えれば、旧聖堂、つまりカトリック教会にとっての最重要モニュメントの破壊である。旧聖堂の決定的な死の局面といえるだろう。もちろん旧聖堂の保存と破壊については、当時さまざまな議論があった。旧聖堂の崩壊の危険性は常に指摘されており、安全性の観点から取り壊しが主張される一方で、旧聖堂を残すべきだという声は大きかった。建物そのものの取り壊しが決定した時にも、旧聖堂に由来しそれを記憶する様々な事物のできる限りの保存がパウルス五世に嘆願された。それだけでなく、その 1605 年の文書には、新聖堂は旧聖堂の立つ場所すべてを覆う必要がある旨が明記されていた[34]。

1571 年、ヴァティカンの聖職者であったティベリオ・アルファラノ(Tiberio Alfarano, 1525-96)は、「悠久のサン・ピエトロ聖堂の完全な図像」と名付けられた素描を残した。これはデュペラックが描いた平面図(ミケランジェロの計画案)と旧聖堂の平面図を重ね合わせ、イコンを描き足したものである(図 10)。その制作意図は、新旧聖堂が分離壁で接合されたハイブリッドな姿への批判であり、新聖堂は旧聖堂を包み込むべきだと主張するために描かれたと考えられている。アルファラノは、ミケランジェロのプランの上に描き出すことで、その計画を批評し、修正することを提案しているのである。新聖堂の外側の旧聖堂という聖域の一部を取り残すことは、神聖なものの冒涜であるというわけだ[35]。

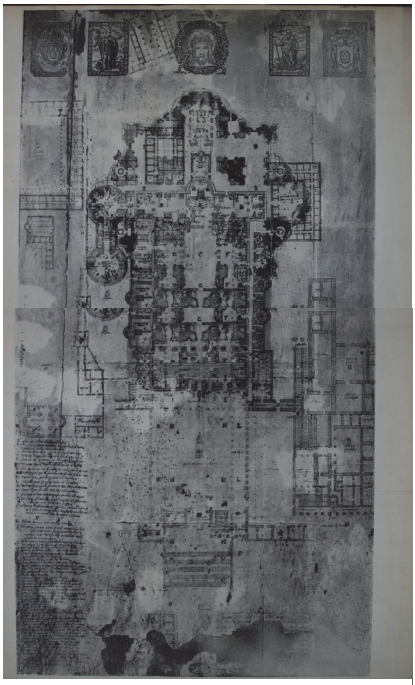

図 10 アルファラノによる「悠久のサン・ピエトロ聖堂の完全な図像」

これは聖堂再建の出発点であるニコラウス五世とアルベルティによっても明確に示されていた方針でもあった。そして実際に、カルロ・マデルノ（Carlo Maderno, 1556-1629）によって作られた新たな外陣とファサードは、旧聖堂の建っていた場所を包むようにつくられた[36]。マデルノは、アルファラノの批判にしたがって、彼が描いた図面の上に直接紙を敷いて、その上に増築部分を描いたと考えられる[37]。いま新聖堂を訪れると、分離壁の部分、すなわち、マデルノによる増築部分と既存部分との接続箇所は明らかな継ぎ目として残されている（図11）。マデルノはこの継ぎ目を隠さずに象徴的なものとして表現し、アルファラノの見解に同調し、彼の建築的意図を受け継ぎ、新しい身廊を実現させた。

図 11 新聖堂の身廊部見上げ。マデルノによる拡張部分はわずかに幅が広がっている。

教会堂を建て替える場合、古い教会堂の建つ領域を聖なるものとし、そこを新しい教会堂が覆うことは一般的であった。なぜなら、聖なるものに触れた場所はあまねく聖遺物であったからである。さらにサン・ピエトロ聖堂の場合、その地面には歴代教皇と聖人たちが眠っている。1605 年の文書でも、旧聖堂の神聖な床と大地が汚されることを防ぎ、そこを覆い守らなければならないと記されていた[38]。この一連の再建では、旧聖堂を聖遺物、新聖堂を聖遺物容器と見なしていたともいわれる。聖遺物は「部分が全体である」（pars pro toto）と考えられていた[39]。つまり、どんな欠片であっても、全体と等価値であるという考え方があり、物質的な多寡は問題ではなかった。この点、サン・ピエトロ聖堂においては、物質的な保存よりも、象徴的な保存と継承が重要であった。全体的な分量でいえば、ごくわずかであるとしても、旧聖堂の部材はアルベルティからベルニーニ（Gian Lorenzo Bernini, 1598-1680）にいたるまで、新聖堂の様々な場所で再利用された[40]。

彼らは、古く由緒ある教会堂の構造と物質よりも、そこで、1200 年以上にわたって蓄積されてきた信仰の記憶と象徴を移し替えることに心を砕いたのである。この場所

の力は、当然建物そのものが引き起こすものでもあるが、それにも増して、その空間で展開された信仰と典礼によって具現化されるのである。聖域を新しい教会堂で囲い込むという強い願いが、新聖堂の最終的なかたち、つまり身廊の例外的な長さとを決定づけたのである。しかし、マデルノによる新しい身廊は、「教皇の列柱廊」と呼ばれる旧聖堂のアトリウムを覆い尽くすという1605年の請願は実現できなかった[41]。

図 12 ベルニーニが計画していたサン・ピエトロ広場の「第三の腕」

そこで次に行われたのが列柱廊の建設である。実現したベルニーニによる広場は、東側に向けて大きく開放されているが、計画案ではそこが「第三の腕」と呼ばれる列柱廊で閉じられていた(図 12)。ベルニーニに先行する建築家カルロ・ライナルディ(Carlo Rainaldi, 1611-91)もまた、列柱で囲まれた広場をイメージしていた[42]。つまり、巨大な列柱廊は旧聖堂の聖域を包む・覆うものとして構想されていたのである。

4. おわりに:サン・ピエトロ聖堂の生と死

サン・ピエトロ聖堂の造営事業を過去の継承の一つの特殊解として理解すべきなのであろうか。カトリックのもう一つの偉大な教会堂でローマの司教座が置かれるサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラーノ大聖堂は、16 世紀末のシクストゥス五世(在位:1585-90)や続く教皇クレメンス八世(在位:1592-1605)を出発点に、ヴァティカンの聖堂と同じような道筋を辿る。まずはバシリカの内陣周りの拡張が行われた。そこは新しい入口と象徴的なファサード、きらびやかな主祭壇、コンスタンティヌスの生涯とバシリカの創設を描いたフレスコ画が備えられ、外陣とは切り離されたほぼ独立した典礼空間として刷新された。ラテラーノの聖堂のファサードは街の中心を向いておらず、ローマ市街地へ向かう大きな街路は内陣側が出発点だった。すなわち、教会を訪れる人々のほとんどは、東のファサード側ではなく、北側の翼廊部分から教会堂に入っていた。翼廊を入口とする新しい内陣はクレメンティーナと呼ばれ、都市ローマとロー

マ司教とのあいだの強いつながりを主張する象徴的空間へと変貌した。その後18世紀半ばにかけて、身廊を含め、この大聖堂もまた物質的にはどんどんと破壊が進んでいく。新しい教会堂で古い教会堂は覆い尽くされ、いくつかの象徴的な部材が再利用された[43]。こうした教会堂の破壊と刷新のプロセスを再検討することで、過去の継承の多様なあり方が見えてくるであろう。

最後にこの再建の過程から、建築の「生」と「死」を考えてみたい。ヨーロッパのモニュメントは、創建以来、姿かたちを少しずつ変えながらも長い間存続しているものが少なくない。ここで問題となるのは、ほぼ物質的には残っていないほど壊されて再建された場合である。サン・ピエトロ聖堂のように、ごくわずかとしかいえないにせよ、旧聖堂の一部が新聖堂にいまも残る以上、それは4世紀の創建から生き続けていると考えるべきだろうか。これまで述べてきたように、初期近代のサン・ピエトロ聖堂の造営事業は、3世紀にわたって新聖堂を建設することと同じ時間をかけて、旧聖堂をどう壊し、弔うかでもあった。キリスト教において、イエスの死と復活は教義と信仰の核をなすといってもよいだろう。聖なるモニュメントもまた、象徴的に一度死んで復活することが必要であった。

新聖堂の建設においては、旧聖堂の物質的な保存が試みられたが、それでもなお、ほぼすべてを壊して建て替えられた。旧聖堂の物質性、ものとしての価値がなかったというわけではない。包むという象徴性が旧聖堂の継承と聖性の保存に必要だったからである。とりわけ対抗宗教改革の流れの中で、サン・ピエトロ聖堂再建の理念と象徴性を主張することは、教皇庁にとってカトリックの興亡をかけた一大事業であった。それは教会の威厳と権力を示すために、壮大で規模が大きな聖堂を建てればよいという単純な話ではなかったはずだ。それはこれまで述べてきた再建の過程が明らかにしている。旧聖堂をものとして残すのではなく、壊し聖遺物と化し、それを新しい聖遺物容器で包む。それにより遺物と容器のどちらとも聖性を増していく。それはサント・シャペルにおける建築と聖遺物の関係に近いのかもしれない[44]。旧聖堂の破壊と新聖堂の建設の詳細なプロセスを復元的に理解することは資料の制約もあり難しいが、西から東（内陣から外陣）へ進む建設や、分離壁の設置、物質的な保存をめぐる議論と、再利用材の新聖堂への配置など、破壊と創造の過程に目を向けることで、初期近代における過去の継承の一つのありさまを見ることができる。

[1] 医者と建築家のアナロジーは『建築論 *De re aedifcatoria*』第十書にて記されている。その邦訳はアルベルティ (1982)。さらに、これに着目した研究として、Cantone (1978), pp. 20-45; Choay (1986), pp. 131-4; 岡北 (2022)。
[2] ルネサンス期の建築書に関する研究は、Guillaume (1998); Hart, Hicks (1998); Payne (1999). 人体と建築のアナロジーについては、Dodds, Tovernor (2002).
[3] Carpo (2011).
[4] Karmon (2011); Choay (1999), pp. 36-48.
[5] ルネサンス期の聖堂造営は、稲川ほか(2014)、295-332 頁およびその参考文献を参照。
[6] Bosman (2004); McKitterick et al. (2013); Goffi (2013).
[7] Palladio (1570), pp. 61-3, pp. 85-7 (Libro quattro).
[8] Palladio (1988); Hart. Hicks (2006).
[9] バルベリーニ手稿(Codex Barberini, Barb.lat.4424)はヴァティカン図書館のデジタルライブラリーで見ることができる(URL: https://digi.vatlib.it/view/MSS_Barb.lat.4424, 2022 年 12 月 7 日閲覧)。«Questo libro è di Giuliano di Francsco Giamberti Architetto Nuovamente Da Sangallo chiamato e molti disegni misurati et tra[t]ti dallo anticho chominciato adns mcccclxv In Roma.»
[10] Burns (1971); Payne et al. (2000); 飛ヶ谷 (2007); Nagel, Wood (2009); Nagel, Wood (2010).
[11] ルネサンス期のウィトルーウィウスの翻訳およびその研究の進展については、Guillaume (1998.); Hart, Hicks (1998); Payne (1999); Carpo (2001); Marder (2017).
[12] 小佐野・姜 (1993)、36-45 頁; Di Teodoro (2020), pp. 21-32. 一方のヴァザーリについては、Sohm (2000); Payne (2001).
[13] Howe (1991), pp. xi-xv, 1-46; Hart, Hicks (2006), p. xviii.
[14] Hart, Hicks (2006), pp. xv-liii.
[15] 『都市ローマの驚異』については、D'Onofrio (1988). その本以降、初期近代までの都市ローマのガイドブックについては、Blennow, Rota (2019), pp. 33-161.
[16] Brothers (2022), pp. 43-75.
[17] Tessari (1997), pp. 123-136; Tessari (2005), pp. 267-72.
[18] ディオクレティアヌスの浴場のサンタ・マリア・デリ・アンジェリ修道院への転用、聖堂のミケランジェロのリノベーションについては、Friggeri, Cianetti (2015); Brodini (2009).
[19] Tessari (1997), pp. 116-23.
[20] Fritsch (2017).
[21] アルベルティについては、Cantone(1978), pp. 20-45; Karmon (2011), pp. 63-6; Choay (1999), pp. 36-48. ラファエッロについては、Choay (2009), pp. 42-7; Di Teodoro (2020), pp. 21-32.
[22] この役職者は Maestri di strada「「都市施設管理官(あるいは道路監督官)」と呼ばれた。教皇による勅令についても含め、以下の文献を参照。Karmon (2011), pp. 47-113; 岡北(2012)。
[23] 聖堂への転用は、Marder, Jones (2015), pp. 231-95. ルネサンス期については 255-95 頁。
[24] Karmon (2011), pp. 47-113.
[25] McKitterick et al. (2013), pp. 1-20.
[26] Silvan (1996); Bolton (2011).
[27] Curti (1997), Frommel (1997); Frommel (2005).
[28] Manetti (2007).
[29] 稲川ほか (2014)、19-42 頁; 伊藤ほか (2020)、64-75 頁。

[30] ブラマンテによる計画案は、稲川ほか (2014)、295-318 頁。
[31] Di Furia (2019), pp. 79-161.
[32] ブラマンテ以降のサン・ピエトロ聖堂の造営事業については、稲川ほか (2014)、318-331 頁。特にミケランジェロによる新聖堂の建設とその完成については、Bellini (2011).
[33] Thoenes (1992); Rice (1997).
[34] Mariani (1997); Richardson, Story (2013).
[35] Alpharano (1914); Ventivoglio (1997); Goffi (2013), pp. 47-96.
[36] マデルノによるファサードについては、Spagnesi (1997), pp. 261-85; Kuntz (2005).
[37] Goffi (2013), pp.97-120.
[38] Richardon, Story (2013), pp. 411-5.
[39] 秋山 (2009)、16-40 頁。
[40] Bosman (2004), pp. 75-104, pp. 119-38.
[41] Richardon, Story (2013), p. 415.
[42] 列柱廊の建設をめぐる議論は、Wittkower (1939-40); Rietbergen (1983); Hagel (1997); D'Amelio (2012); Villani (2016).
[43] Freiberg (1995); Bosman et al (2020).
[44] 木俣（2013）、126-59 頁。

＜参考文献＞

Alberti, Leon Battista. *L'architettura (De re aedificatoria),* Testo latino e traduzione a cura di Giovanni Orlandi, Introduzione e note di Paolo Portoghesi, Milano, Polifilo, 1966.

Alpharano, Tiberio. *De basilicae vaticanae antiquissima et nova structura*, Roma, Tipografia Poliglotta Vaticana, 1914.

Bellini, Federico. *La basilica di San Pietro. Da Michelangelo a Della Porta*, Roma, Argos, 2011.

Blennow, Anna; Rota, Stefano Fogelberg. (eds.) *Rome and the Guidebook Tradition. From the Middle Ages to the 20th Century*, Berlin, De Gruyter, 2019.

Bolton, Brenda. "A new Rome in a small place? Imitation and re-creation in the patrimony of Saint Peter", in *Rome across Time and Space, c. 500–1400: Cultural Transmission and the Exchange of Ideas*, Edited by Claudia Bolgia, Rosamond McKitterick, John Osborne, Cambridge (UK), Cambridge University Press, 2011, pp. 305-22.

Bosman, Lex. *The Power of Tradition. Spolia in the archicture of St. Peter's in the Vatican*, Elilversum, Verloren, 2004.

Bosman, Lex; Haynes, Ian P.; Liverani, Paolo. (eds.) *The Basilica of Saint John Lateran to 1600*, Cambridge (UK), Cambridge University Press, 2020.

Brodini, Alessandro. "Santa Maria degli Angeli", in *Michelangelo architetto a Roma*, a cura di Mauro Mussolin, Milano Silvana, 2009, pp. 240-5.

Brothers, Cammy. *Giuliano Da Sangallo and the Ruins of Rome*, Princeton, Princeton University Press, 2022.

Burns, Howard. "Quattrocento Architecture and the Antique: Some Problems", in *Classical Influences on European Culture, A.D. 500–1500*, Edited by Robert Ralph Bolgar, Cambridge (UK), Cambridge University Press, 1977, pp. 269–87.

Cantone, Gaetana. *La Città di Marmo da Alberti a Serlio La Storia tra Progettazione e Restauro*, Officina Edizioni, Roma, 1978.

Carpo, Mario. *Architecture in the Age of Printing: Orality, Writing, Typography, and Printed Images in the History of Architectural Theory*, Cambridge (US), MIT Press, 2001.

Carpo, Mario. *The Alphabet and the Algorithm*, Cambridge (US), MIT Press, 2011.

Choay, Françoise. *La règle et le modèle. Sur la théorie de l'architecture et de l'urbanisme*, Paris, Seuil, 1986.

Choay, Françoise. *L'Allégorie du patrimoine*, Paris, Seuil, 1999.

Choay, Françoise. *Le patrimoine en questions. Anthologie pour un combat*, Paris, Seuil, 2009.

Curti, Mario. "L'admirabile Templum di Giannozzzo Manetti alla luce di una ricognizione delle fonti documentarie", in Spagnesi (a cura di.), 1997, pp. 111-118.

D'Amelio, Maria Grazia. "Il colonnato calcidico di piazza San Pietro a Roma: immagine, disegno e realizzazione architettonica (1656-1667)", in *Il cantiere storico. Organizzazione, mestieri, tecniche costruttive*, a cura di Mauro Volpiano, Savigliano, L'Artistica Editrice, 2012, pp. 54-71.

D'Onofrio, Cesare. *Visitiamo Roma mille anni fa: la città dei mirabilia*, Roma, Romana società editrice, 1988.

Di Furia, Arthur J.. *Maarten van Heemskerck's Rome. Antiquity, Memory, and the Cult of Ruins*, Leiden/Boston, Brill, 2019.

Di Teodoro, Francesco Paolo. *Lettera a Leone X di Raffaello e Baldassarre Castiglione*, Firenze, Leo. S. Olschki, 2020.

Dodds, George; Tovernor, Robert. (eds.) *Body and Building: Essays on the Changing Relation of Body and Architecture*, Cambridge (US), MIT Press, 2002.

Freiberg, Jack. *The Lateran in 1600: Christian Concord in Counter-Reformation Rome,* Cambridge (UK), Cambridge University Press, 1995.

Friggeri, Rosanna; Cianetti, Marins Magnani. (a cura di.) *Le terme di Diocleziano. La Certosa di Santa Maria degli Angeli*, Milano, Mondadori Electa, 2015.

Fritsch, Bernhard. "The Ancient Monuments of Rome and Their Use as Suppliers of Remnants for the Construction of New St. Peter's Basilica. Building Activity in Rome during the Renaissance", in *Perspektiven der Spolienforschung 2. Zentren und Konjunkturen der Spoliierung*, hrsg. von Stefan Altekamp, Carmen Marcks-Jacobs and Peter Seiler, Berlin, Topoi, 2017, pp. 335-56.

Frommel, Christoph Luitpold. "Il San Pietro di Nicolò V", in Spagnesi (a cura di.), 1997, pp. 103-110.

Frommel, Christoph Luitpold. "Il San Pietro di Niccolò V", in *La Roma di Leon Battista Alberti. Umanisti, architetti e artisti alla scoperta dell'antico nella città del Quattrocento*, a cura di Francesco Paolo Fiore, Milano, Skira, 2005, pp. 103-112.

Goffi, Federica. *Time Matter(s): Invention and Re-Imagination in Built Conservation*, Farnham, Ashgate, 2013.

Guillaume, Jean. (éd.) *Les traités d'architecture de la renaissance*, Paris, Picard, 1988.

Hagel, Hellmut. "Bernini, Carlo Fontana e la fortuna del 'terzo braccio' del colonato di Piazzza San Pietro in Vaticano", in Spagnesi (a cura di.), 1997, pp. 337-60.

Hart, Vaughan; Hicks, Peter. (eds.) *Paper Palaces -The Rise of the Renaissance Architectural Treatise-*, New Haven and London, Yale University Press, 1998.

Hart, Vaughan; Hicks, Peter. *Palladio's Rome: A Translation of Andrea Palladio's Two Guidebooks to Rome*, New Haven and London, Yale University Press, 2006.

Howe, Eunice D.. *Andrea Palladio. The Churches of Rome*, Binghamton/New York, Center for

Medieval and Early Renaissance Studies, 1991.

Karmon, David. *The Ruin of the Eternal City, Antiquity & Preservation in Renaissance Rome*, Oxford/New York, 2011.

Kuntz, Margaret. "Maderno's Building Procedures at New St. Peter's: Why the Facade First", in «*Zeitschrift für Kunstgeschichte*», 68, 2005, pp.41-60.

Manetti, Giannozzo. *Liber Secundus De Getis Nocolai Quinti Summi pontificis*, in Christine Smith and Joseph F. O'Connor, *Building the Kingdom: Giannozzo Manetti on the Material and Spiritual Edifice*, Ann Arbor, Brepols/ACMRS, 2007, pp. 362-469.

Marder, Tod A. "Vitruvius and the Architectural Treatise in Early Modern Europe", in *The Companions to the history of Architecture, vol.1, Renaissance and Baroque Architecture*, Edited by Alina Payne, Chichester, Wiley-Blackwell, 2017, pp. 42-72.

Marder, Tod A.; Jones, Mark Wilson. (eds.) *The Pantheon. From Antiquity to the Present*, Cambridge (UK), Cambridge University Press, 2015.

Mariani, Gaetano Miarelli. "L'antico San Pietro, demolirlo o conservarlo ?", in Spagnesi (a cura di.), 1997, pp. 229-42.

McKitterick, Richard; Osborne, John; Richardson, Carol M.; Story, Joanna E.. (eds.) *Old Saint Peter's, Rome*, Cambridge (UK), Cambridge University Press, 2013.

Nagel Alexander; Wood, Christopher S.. "What Counted as an 'Antiquity' in the Renaissance?", in *Renaissance Medievalisms*, Edited by Konrad Eisenbichler, Toronto, Centre for Reformation and Renaissance Studies, 2009, pp. 53–74.

Nagel Alexander; Wood, Christopher S.. *Anachronic Renaissance*, New York and Cambridge (US), Zone Books, 2010.

Palladio, Andrea. *I Quattro libri dell'architettura*, Venezia, 1570.

Palladio, Andrea. *Scritti sull'architettura (1554-1579)*, a cura di Lionello Puppi, 1988.

Payne, Alina. *The Architectural Treatise in the Italian Renaissance -Architectural Invention, Ornament, and Literary Culture-*, Cambridge, Cambridge University Press, 1999.

Payne, Alina; Kuttner, Ann; and Smick, Rebekah. (eds.) *Antiquity and Its Interpreters*, Cambridge (UK), Cambridge University Press, 2000.

Payne, Alina. "Vasari, architecture, and the Origins of historicizing Art", in «*RES: Anthropology and Aesthetics*», No. 40, 2001, pp. 51-76.

Richardson, Carol M.; Story, Joanna. "Appendix. Letter of the canons of Saint Peter's to Paul V concerning the demolition of the old basilica, 1605", in McKitterick et al. (eds.), 2013, pp. 404-15.

Rice, Louise. "La coesistenza delle due basiliche",in Spagnesi (a cura di.), 1997, pp. 255-69.

Rietbergen, Peter. “A Vision Come True. Pope Alexander VII, Gianlorenzo Bernini and the Colonnades of St. Peter’s”, in «*Mededelingen van het Nederlands Historisch Instituut te Rome*», 44-45, 1983, pp. 111-64.

Silvan, Pierluigi. “S. Pietro senza papa: testimonianze del periodo avignonese”, in *Roma, Napoli, Avignone: arte di curia, arte di corte 1300–1377*, a cura di Alessandro Tomei, Torino, Seat, 1996, pp. 225–57.

Sohm, Philip. “Ordering history with style: Giorgio Vasari on the art of history”, in Payne et al. (eds.), 2000, pp. 40-54.

Spagnesi, Gianfranco. (a cura di.) *L'architettura della basilica di San Pietro. Storia e costruzione*, Roma, Bonsignori, 1997.

Tessari, Cristiano. “Baldassarre Peruzzi e il palazzo Savelli sul teatro di Marcello”, in *Baldassarre Peruzzi 1481-1536*, a cura di Christoph Luitpold Frommel, Arnaldo Bruschi, Howard Burns, Francesco Paolo Fiore, Pier Nicola Pagliara, Venezia, Marsilio, 2005, pp. 267-72.

Tessari, Cristiano. *Baldassarre Peruzzi. Il progetto dell'antico*, Milano, Electa, 1997, pp. 123-136.

Thoenes, Christof.“Alt- und neu-St.-Peter unter einem Dach. Zu Antonio da Sangallos ‘Muro Divisorio’”, in *Architektur und Kunst im Abendland: Festschrift zur Vollendung des 65. Lebensjahres von Günter Urban*, Hrsg. von Michael Jansen, Klaus Winands, Klaus, Rom, Herder, 1992, pp. 51-61.

Ventivoglio, Enzo. “Tiberio Alfarano: Le piante del Vecchio S. Pietro sulla pianta del nuovo edita dal Dupérac”, in Spagnesi (a cura di.), 1997, pp. 229-42.

Villani, Marcello. *Il Colonnato di piazza S. Pietro. Opera che fra le antiche poche ne ha pari, fra le moderne nessuna*, Roma ,Gangemi, 2016.

Wittkower, Rudolf. “A Counter-Project to Bernini's "Piazza di San Pietro"”, in «*Journal of the Warburg and Courtauld Institutes*», Vol. 3, No. 1/2 , 1939-40, pp. 88-106.

秋山聰『聖遺物崇敬の心性史 西洋中世の聖性と造形』、講談社、2009 年

レオン・バッティスタ・アルベルティ『建築論』、相川浩訳、中央公論美術出版、1982 年

伊藤喜彦・頴原澄子・岡北一孝・加藤耕一・黒田泰介・中島智章・松本裕・横手義洋『リノベーションからみる西洋建築史 歴史の継承と創造性』、彰国社、2020 年

稲川直樹・桑木野幸司・岡北一孝『ブラマンテ 盛期ルネサンス建築の構築者』、NTT 出版、2014 年

岡北一孝「1452 年の『教皇ニコラウス五世によって新たに承認された都市施設管理官に関する法規』へのアルベルティの関与について」、『日本建築学会計画系論文集』、第 77 巻、第 679 号、2012 年 9 月、2219-2224 頁

岡北一孝「アルベルティ『建築論』の pulchritudo と ornamentum―建築における美と装飾を再考する―」、『京都美術工芸大学研究紀要』、第 2 号、2022 年 3 月、49-65 頁
小佐野重利・姜雄編『ラファエッロと古代ローマ建築 : 教皇レオ 10 世宛書簡に関する研究を中心に』、中央公論美術出版、1993 年
木俣元一『ゴシックの視覚宇宙』、名古屋大学出版会、2013 年
飛ヶ谷潤一郎『盛期ルネサンスの古代建築の解釈』、中央公論美術出版、2007 年

＜図版出典＞

図 1　*Codex Barberini,* Biblioteca Apostolica Vaticana, Barb. lat. 4424, fol. 41r. (https://digi.vatlib.it/view/MSS_Barb.lat.4424, 2022 年 12 月 10 日閲覧)

図 2　筆者撮影（2014 年）。

図 3　Thoenes, Christof. et al., *San Pietro in Vaticano. I mosaici e lo spazio sacro*, Milano/Roma, Jaca books, 2011, p. 25.

図 4　Paolo Fiore, Francesco. (a cura di.) *La Roma di Leon Battista Alberti. Umanisti, architetti e artisti alla scoperta dell'antico nella città del Quattrocento,* Milano, Skira, 2005, p. 356.

図 5　Tavernor, Robert. *On Alberti and the Art of Building*, New Haven/London, Yale University Press, 1998, p.61.

図 6　伊藤ほか (2020)、67 頁。

図 7　Thoenes, Christof .et al., *San Pietro in Vaticano, op. cit.,* p. 42. (Gabinetto dei Disegni e delle Stampe degli Uffizi, U20A)

図 8　Brandenburg, Hugo; Thoenes, Christof; Ballardini, Antonella. *San Pietro. Storia di un monumento*, Milano/Roma, Jaca books, 2020, p. 114.

図 9　*Ibid*., p. 35.

図 10　Alpharano (1914), tav. 2.

図 11　筆者撮影（2017 年）。

図 12　Falda, Giovanni Battista. «Piazza e Portici della Basilica Vaticana», in *Il nvovo teatro delle fabriche, et edificii, in prospettiva di Roma moderna, sotto il felice pontificato di n.s. papa Alessandro VII. Libro primo*, Roma, 1665. (https://www.metmuseum.org/art/collection/search/414681, 2022 年 12 月 10 日閲覧)